

“You are an amateur.”（この未熟者め！）

この原稿の執筆時点で国際部のワシントン国際問題研究所（JITTI USA）担当が抱えている最大の課題は、3月末にワシントンD.C.で開催の「日米鉄道シンポジウム2026」（APTA（米国公共交通協会）共催）。鉄道のテーマは2年ぶりとなるが、企画のための情報収集や調整はJITTI USAを中心に1年程前から開始。企画案、パネルのイメージ等核となる部分はJITTI USA側で素

案を作成、調整が完了した段階で、日米双方で登壇者探しが始まる。初めて担当した2025年春の日米国際航空シンポジウムでは、議論にASEANを包含することが最大の売り。このため、半年前に旧知のシンガポール（星）航空局長に登壇を打診していたものの、現職航空局長の米国出張は不可との星政府判断。時差の関係でオンライン登壇も無理。持てる限りの人脈を駆使しつつも日々薄氷を踏む思い。結局、これも旧知の前々航空局長にご登壇頂き、事なきを得た。教訓①日米とは全く距離感が異なる米星関係についての認識の甘さ。②アクセスも要チェック（米星首都間には直行便なし）。③ターゲットとなる政府要人にはマメに営業をかける。一体何十年国際畑、交渉畑を歩いて来たのか。こういう時に思い出す戒めは、その昔、日米航空交渉で米側が放ったという手厳しいタイトルの一言。

また、国交省航空局の肝いり案件として、ASEAN各国のSAF（持続可能な航空燃料）の製造・使用拡大に向けたプロジェクトを担当。SAF原料（バイオマスや廃棄物）をICAOに登録し認証を得るノウハウをASEAN各国に移転するため、今秋、ベトナムでのセミナー開催を予定。技術的には素人ながら、国際航空分野における脱炭素化推進への関与も業務のひとつ。

研究員としては、弾道飛行、首都圏空域と航空分野に関する2つの研究チームに参画。但し、「研究すること」自体がアマチュア、というよりも完全な「トーチロ」状態。諸先輩方からひとつひとつ教えを受けて七転び八起き。否、七転八倒か。

主任研究員 水田 早苗

【専門分野】 航空、航空交渉
【在籍期間】 2024年11月～



視野を広げ、思考を深める

着任からおよそ1年が経過しました。現在は、「物流の強靱化」「コンテナの降ろし取り」「混雑空港の空域」に関する3件の共同研究に携わっています。とりわけ物流の強靱化に関する研究調査では主担当として、被災後の経済活動を支える物流に着目し、インフラ・制度・輸送といった側面をモード横断的に捉えながら、物流の実態分析を行い、政策的示唆の提示に向けて取り組んでいます。テーマが幅広いことから、いくつかのケースを想定して解像度を高めながら研究を進めています。社会基盤としての物流をいかに強靱なものとするかは重要な課題であり、その難しさと奥行きを日々実感しています。

また、当研究所は海外案件が多く、国際経験を積む機会にも恵まれています。昨年9月には、第28回日中運輸経済技術交流会議に参加するため中国へ出張しました。本会議は、中国国家発展改革委員会総合運輸研究所と国土交通省および当研究所との間で、運輸政策や運輸事情全般に関する情報交換を目的として、概ね毎年開催される会議です。今回は「交通・物流と産業の融合」「都市圏の交通発展」「緊急物流（緊急物資輸送）」の3議題が設定され、私は「交通・物流と産業の融合」セッションにおいて「港湾と臨港産業」をテーマに発表しました。中国側研究者との率直な議論を通じて、課題認識や政策形成の背景にある思考枠組みに触れることができ、視野を広げる貴重な機会となりました。

日々の業務では、さまざまな専門知識を持つ研究員が集まり、日常的な議論を通じて調査研究が進められています。思考の“空域”を広げるには対話が欠かせませんし、ときには自らの前提をいったん“降ろし”、新たな視点を“取り”込む柔軟さも求められます。そうした積み重ねが、自分の考えを少しずつ“強靱化”していくのだと感じています。研究テーマに学びながら、今後も自身の思考を少しずつ深めていきたいと思えます。

研究員 坂本 渉

【専門分野】 空港、港湾
【出身組織】 国土交通省
【在籍期間】 2025年4月～



「人に学ぶ」1年

2025年4月より、建設コンサルタント会社の株式会社建設技術研究所から出向している佐野と申します。着任当初、屋井所長から「ここでは、これまでの業務とは違うことを経験してもらおう」と言葉をいただき、その期待に応えるべく、新しいテーマに意欲的に取り組んでまいりました。

共同研究では、新モビリティの社会的受容、コンテナターミナルの効率化、鉄道物流の強靱化という3つのテーマを担当させていただいています。受託業務については、鉄道分野の計画や整備効果分析に従事し、これまで培ってきた道路・交通計画の経験をどのように応用できるかを意識しながら業務を進めています。

研究所では、プロパーの方々に加え、国土交通省、鉄道・物流事業者、コンサルタントなど、私より若く、多様な経歴を持つ出向者と議論する機会が多く、皆さんが自主的でエネルギーに研究を進める姿に日々刺激を受けています。また、屋井所長との共同研究の打合せ、各種委員会、行政・民間の要職の方々の講義やシンポジウムなど、最前線の現場を知る方々から直接学べる機会は、非常に貴重で有益な経験となっています。

少し前になりますが、私は日本の観光学・景観学の先駆者である鈴木忠義先生を塾長とした「当て塾」で学んでおりました。当て塾には、鈴木先生の弟子・孫弟子にあたる幅広い世代の技術者が集まり、地域や社会に向き合う視点を共有しながら学び合う場がありました。鈴木先生が示されてきた「人に学ぶ」「現場をよく見る」という姿勢は、研究所での議論や共同研究の場でも大切にしたい原点だと、改めて感じています。

働き方の面では、AIを積極的に活用し、AIに任せる部分と自分で考える部分を整理しながら、生産性向上にも取り組んでいます。

1年間の成果の一部は、途中経過も含めて外部に発信する機会がありました。今後も関係者の皆さまにとって有意義な報告ができるよう努めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

研究員 佐野 薫

【専門分野】 道路計画、交通計画
【出身組織】 株式会社建設技術研究所
【在籍期間】 2025年4月～



運輸総合研究所で得た財産

2025年4月に西日本鉄道株式会社（西鉄）から運輸総合研究所に派遣され、1年が経ちました。西鉄では、鉄道の運行に欠かせない信号・通信保安設備の設計や工事管理、中長期投資計画の策定等に従事してきました。踏切等の鉄道信号分野の業務を中心に携わってきたことに加え、出身地の福岡以外で生活した経験がなかったため、「研究という仕事が務まるだろうか」「満員電車の東京生活に順応できるだろうか」と不安を抱えてのスタートでした。

現在、研究所では主に3つの業務を担当しています。1つ目は、鉄道の新線建設や改良計画に関する需要予測や収支採算性を検証する受託調査（コンサルティング業務）です。これまで踏切では“開かず”にしないための工夫を重ねてきましたが、今は鉄道事業そのものが行き詰まらないための将来需要や採算性を分析しています。目の前の安全確保から、鉄道の持続可能性を考える視点へと視野が広がりました。2つ目は、共同研究「今後の東京圏を支える鉄道のあり方に関する調査研究」における「駅周辺施設・駅勢圏人口と鉄道利用との関係分析」です。データ分析の世界は、信号現示のように明確な答えが示されるわけではありません。転てつ器で進路を選ぶように、さまざまな条件を考慮しつつ、慎重に判断しながら最適な方向性を探っています。3つ目は広報業務です。本機関誌『運輸総研だより』の編集及びSNS（X：旧Twitter）の中の人を担当しています。研究成果をより多くの方に届けるため、専門的な内容をわかりやすい表現に置き換え、ビジュアル面での工夫も心がけています。

また、航空、物流、コンサルタント、国土交通省等、多様な分野からの派遣者と共に働き、日々の議論や何気ない会話からも多くの学びを得ています。異分野の方々との交流は、私にとって貴重な財産です。

さらに、東京大学公共政策大学院での授業聴講や空港・港湾・物流施設の現地視察、研究所で築いた人脈を通じた鉄道他社の現場見学や意見交換等、知見を広げる機会にも恵まれました。今後は、海外の鉄道施策や都市交通の先進事例を現地で学び、国際的視点を取り入れた分析へと発展させ、その成果を研究活動や派遣元である西鉄への還元につなげたいと考えています。研究所で得た経験と知見という「財産」を、自身の成長だけでなく、世の中の役に立つよう、今後も研鑽を重ねていきます。

研究員 中島 弘至

【専門分野】 鉄道
【出身組織】 西日本鉄道株式会社
【在籍期間】 2025年4月～

一歩引いた目線で鉄道を追いかけた貴重な時間

運輸総合研究所に着任し、早いもので約1年が経過しようとしています。私はこれまで15年近く、鉄道電気部門の第一線に身を置いてきました。保守業務を皮切りに、施工管理、設計、さらには企画・管理部門まで、鉄道電気に関する一通りの業務を経験してまいりました。これまでは常に「現場」を間近に見てきましたが、本研究所においては、一歩引いた客観的な立場から業界全体を俯瞰し、「これからの鉄道は

どうあるべきか」を深く考える日々を過ごしています。着任当初は、研究という慣れない業務に不安を抱くこともありましたが、先生方や周囲の手厚いご指導のおかげでその不安も払拭され、現在は充実感を持って業務に邁進しております。

現在私が取り組んでいる研究は、「今後の東京圏を支える鉄道のあり方に関する調査研究」における「駅周辺施設・駅勢圏人口と鉄道利用との関係分析（駅カルテ）」というテーマです。本研究は、鉄道利用動向の変化を定量的に把握するとともに、駅周辺の機能集積特性を明らかにすることで、最終的に乗降人員の増加へ繋げることを目的としています。人口減少や働き方の多様化、消費行動の変化、新モビリティの台頭など、鉄道を取り巻く環境の変化は複雑であり、要因の解明は決して容易ではありません。しかし、現場で培った知見に基づき、確かな仮説を立てながら分析を進めています。分析にあたっては、「鉄道事業者としての視点」を失わず、現場で見て感じてきたリアリティを大切にすることを常に意識しています。当初は研究的なアプローチとの乖離に苦慮した時期もありましたが、試行錯誤を重ねる中で、少しずつ自分なりの視点が形になってきたと実感しています。こうした成長を実感できるのも、多様なバックグラウンドを持つ研究員が知見を共有し、互いにフォローし合える本研究所の素晴らしい環境があってこそだと深く感謝しております。

将来の鉄道事業について熟考できるこの時間は、私にとって大変貴重なものです。限られた時間を一分一秒惜しむことなく、鉄道のさらなる発展に寄与できるよう、引き続き研究に励んでまいります。

研究員 山下 洋輝

【専門分野】 鉄道
【出身組織】 東武鉄道株式会社
【在籍期間】 2025年4月～



米国の変化を間近に感じた1年半

ワシントン国際問題研究所（JITTI USA）に赴任し、1年半近くが経つところです。出向元の成田国際空港株式会社では空港運営に関する実務的な業務に携わってきましたが、JITTI USAでは、米国等の航空・空港分野に関する調査・研究、日々の情報収集や発信を行っています。研究業務に腰を据え

て取り組むのは初めての経験となるため、試行錯誤しながらも、空港運営についてより俯瞰的な目で捉えることのできる貴重な機会でもあると感じています。米国では、空港の運営形態や収入構造などが日本と異なる点も多いためそれを勉強する一方で、赴任後まもなくして発足した第二次トランプ政権の関連ニュースを追うのも一苦労という感覚でした。米国人からよく、米国での生活はどうかと聞かれることがありますが、（基本はポジティブな回答をするのですが、）「非常に“ユニークな”時期にいたることができて貴重な経験です」と答えると、「とても良い表現だね」と苦笑いと共に返ってくることもしばしばで、米国人から見ても特異な状況なのだなと感じます。航空分野では、脱炭素政策の転換や航空管制システムの刷新などの政策の変化が起こっており、引き続き注視していきたいと思っています。また、赴任以来、「航空」と「国際交流」の2回のシンポジウムの開催に担当として携わることができましたが、いずれの回でも、政権交代直後の政府内のセンシティブな状況や政府閉鎖の影響等により、政府機関の登壇者の調整が直前まで難航したことは非常に印象深かったです。

事務所のあるワシントンD.C.は、政府機関に加えて多くの企業や団体の政府渉外担当が拠点を置いており、航空分野についても業界内の交流や意見交換が活発に行われている印象で、関係者が顔を合わせる機会も多く、情報に接する機会が多く持てる点は恵まれていると感じます。そうした地の利や、米国の今を、身をもって経験できる機会に感謝しつつ、引き続き業務に取り組んで参りたいと思います。

ワシントン国際問題研究所 研究員
中村 由季子

【専門分野】 空港、航空、観光
【出身組織】 成田国際空港株式会社
【在籍期間】 2024年10月～

